

青年期における対人関係性の変化によって自己が変容することについての一考察¹⁾

竹田 駿介*

A Study on Self-transformation by Interpersonal Relationship Change in Adolescence

Shunsuke TAKEDA*

There is the problem on the self-value for the approval to the human, and there is the indication on the difficulty of the interpersonal relation in the adolescence. In this study, it was made that how the aspect of the self-changed in the interpersonal relation was examined to be a purpose. Semi-structured interviews were conducted with five university students, and the results were analyzed using the modified grounded theory approach. 14 concepts, 4 subcategories, and 4 major categories were generated. The major categories generated are <<Difficulties from a growth history>>, <<an attitude toward the outside world>>, <<painful self-understanding>>, and <<Acceptance and search for new ways>>. The negative image precedes in the interpersonal relation from the growth history, and the internal attitude is produced, and it becomes negative. On the other hand, it was suggested that acceptance of negative aspects in the relationship leads to a realistic compromise instead of trying to avoid harm.

key words: self, adolescence, the process of self-transformation

問 題

人は生まれてすぐに養育者と乳児の相互交流の中で、乳児は快や不快などのさまざまな情緒的な体験をする。情緒的な体験を養育者に理解され意味づけられていく。こうした体験が積み重なって乳児の情緒的な状態の調整と実行機能の能力の発達を促していく(Carlson, 2009)。こういった発達を経て、様々な他者との関係の中で成長、発達し、社会的な存在として生きていくことが可能になる。

その中でも人との在り方の中で自身をどう位置付けていくのかは、青年期の発達課題である自我同一性を確立する際に重要なことである(Erikson, 1950/1977)。高田(1997)は青年期に対象を概念的に捉えることが可能になり、自分自身の存在や価値を認識できるようになるとし、自己概念が多様化することを指摘している。古沢(1973)は、青年期では、自分自身で未来に対しての目標や価値を見つけ、児童期までの養育者からの反映によって形成されてきた自己像に反抗し、実感としての自己像を得るための試

¹⁾ 貴重なコメントをくださった先生方、あたたかいご支援・ご助言をくださった大阪大学老松先生、そしてご多忙中、本論文に協力して頂いた芳田めぐみ先生をはじめとする皆さまに心から感謝いたします。

* 大阪大学大学院

Osaka University Graduate School of Human Sciences, 1-1 Yamadaoka, Suita City, Osaka 565-0871, Japan.

みとして家族以外の他者を取り入れるようになる、と述べており、自我同一性を確立していくためには他者との関係性が重要であるといえる。加えて、自我同一性の感覚が外的な活動に対しての認知的評価との関連によって形成、獲得されていること(山田, 2004)や、私的な現実自己と社会的な理想自己とのズレが大きいか程、自我同一性混乱の得点が高くなること(松田・広瀬, 1982)からも、他者との関係性も重要であると言えよう。

けれども現代社会では共同体の脆弱化に伴い、他者との関係において「空気を読む」といったコミュニケーション能力が求められ、自己価値をめぐる問題が生じていると雨宮・菅野(2008)は指摘している。こういった指摘に加え、土井(2008)は、現代の青年は不安定な自己を支えるために、身近な人間からの承認を受け続けなければならないとしている。そのため、対立の顕在化を極端に恐れ、いかなる場合でも相手を傷つけないよう細かい配慮を行う「優しい関係」にエネルギーを費やしている、と述べている。岡田(2007)は青年の対人関係について研究を行い、3つの特徴に分類している。その3つとは、「1. 関係の希薄さ(対人関係からの退却)」、「2. 見かけのノリの良さ(群れ)」、「3. やさしさ(傷つけられる・傷つけることへの恐れ)」であった。

また、近年LINEなどのSocial Networking Service(以下、SNSと略記)を利用したComputer-Mediated Communication(以下、CMCと略記)も利用されるようになってきている。友人に嫌われることへの懸念から友人からの返信が来ないことを気にし(仁尾・石田・内海, 2009)、友人からの否定的評価に敏感になり、LINE上のやり取りで過剰に気を遣う(時岡・佐藤・児玉・田附・竹中・松波・岩井・木村・鈴木・橋本・神代, 桑原, 2017)ことから、CMCという手段が青年期の友人関係におけるコミュニケーションに関連していると推察される。

このような対人関係の特徴がみられる中で、齋藤(2013)は周囲からの「承認欲求」が前面化し、自身で自分の意味や価値を持つことへの不安が生じると述べている。三好(2001)も“個”-“集団”間葛藤から自我同一性についての調査を行い、“集団”との葛藤が自己感覚の動揺、自己受容感の低さ、自己依拠に関する不全感といった基本的な自我同一性の感覚とつながっており、自我同一性の危機状態と強い関

連を持っていることを示した。

こうしたことから青年期において、対人関係の中でどのように自己を獲得していくかは、重要な課題の一つとなっていると考えられる。浅野(2006)は単一の自己に拘るよりも目の前の他者の前に合わせて行動し、場面に応じて複数の自己を持つことが適応的である、と述べた。「空気を読む」、「優しい関係」に見られる対人関係の特徴において、自身だけでなく相手にも目の前の他者に合わせて上手く行動することを期待するため、場面に応じて複数の自己を持つ適応の仕方は、突発的な状況におかれな限り統制が乱れることはない。しかし、前提が崩れてしまうと統制が乱れ、適応が難しくなってしまう可能性は強まると考えられる(柴山, 2012)。成田(2006)は青年期に見られる特有の病理として、場面ごとに異なるふるまいをすることで適応をしているものの、その一方で自己の統合を放棄し、悩むことを挙げている。山田・安東・宮川・奥田(1987)は、現代の青年に特有の病理として、ふれあい恐怖を挙げている。ふれあい恐怖とは、表面的関係には困難を感じず、関係が深まる事に対して抱く漠然とした対人困難感である。

こういった困難についての臨床的な研究も一定なされてきている。その中でも中澤(2018)は、インターネットなどの利用が一般化されてきた社会構造の中では現実で他者と交流する体験が希薄になり、現実的に他者とリアルに接触する心理的援助は、新鮮であると同時に脅威にもなり得ると指摘した。それに加え、援助に至るまでには準備が必要だと示唆している。しかし、近年の社会的な構造を加味した現代青年の対人関係の質については未確認な部分が多い(時岡ら, 2017)。

人は経験によってさまざまな価値や自己概念を作り上げていき、自己を形成していく(溝上, 1999)という指摘にもあるように、主観的な世界を取り上げ、外的世界とどう向き合っているのかという経験的な側面も組み入れてその様相を明らかにすることがより包括的な理解のためには重要である。そのため本研究では、自己の使い分けによって対人関係の間に生じる葛藤、様々な感情や考えについての主観的な体験を尋ね、それに伴い自己側面がどのように変容していくかのプロセスを検討する。その中で、心理的な援助をしていくために考慮すべき要因にも着目

Table 1 対象者の概要

ID	性別	学年	年齢	学部
A	男性	1年生	19歳	外国語
B	男性	2年生	21歳	理学
C	男性	1年生	18歳	人間科学
D	男性	1年生	18歳	外国語
E	男性	1年生	18歳	理学

し、従来の研究で準備が必要とされている関係性によって生じる生きづらさについての臨床的取り扱いについて検討することとする。

その際、山本・松井・山成(1982)は、自己概念を「自己全体に対して向けられる評価と、様々な側面から構成される自己の認知像とに分けて整理できる」と述べている。本研究で使用する「自己の側面」という言葉は、「様々な自己の側面から構成される自己の認知像」と定義することとする。

方 法

サンプリング

講義時間の一部を利用し研究の趣旨について説明し協力者を募った。募集対象は18～25歳の大学生であった。その時に参加協力を申し出た大学生は男女合わせて9名で、日程調整をした結果男性5名からの協力が得られた。平均年齢は、平均年齢18.8歳(SD=1.30)であった。調査協力者の情報についてTable 1にまとめた。なお、今回の調査協力者は調査を実施した大学が1大学のみである点、学部は異なるもののほとんどが1年生である点を考慮するとサンプリングに偏りがある集団と推測され、得られた語りは限定的なデータとして扱うこととする。

調査方法

本研究は対人関係においてどのように苦悩と向き合い、自己の側面がどのように変容していったのかのプロセスを明らかにし、従来自分が持っていた自己概念が他者と関係性を築くことによりどのように変容していったのかを検討することを目的としている。そのため、①協力者にどのような自分の側面があるのかを説明してもらい、②側面を用いている時にどういった気持ちになるのか、③それらの側面によって、対人関係上どのような変動があったのか、④それぞれの側面はどのような関係性を持っていたか、という4項目からなるインタビューガイドを作

成した。面接は半構造化面接を行い、以上の項目を基本としながら、話の流れに沿って随時質問を加えた。調査は、2014年9月に実施し、実施時間は1人につき45～60分程度であった。これらの内容をICレコーダーに記録し、面接によって得られた音声データはすべて文字起こししてトランスクリプトを作成した。

分析の手続き

本研究では、木下(2003)の修正版グランデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTAと略記)を用いた。インタビューで得られたトランスクリプトを分析データとした。まず、本研究での分析テーマを「自己の使い分けによって対人関係の間に生じる葛藤や様々な感情や考えと、それに伴い自己側面がどのように変容していくかのプロセス」と設定した。また、分析結果の中心に位置する分析焦点者については、分析開始時には「対人関係において自己を使い分けしている協力者」と設定したが、分析が進むにつれて対人関係において葛藤を感じる事が重要な概念であることが見えてきたため、最終的に「対人関係において葛藤を感じている協力者」と設定した。その後の分析の手続きは以下の通りである。①分析テーマに照らし合わせてデータに着目し、類似する具体例も説明できるような概念を生成した。概念生成時にワークシートを作成し、概念名、定義、具体例、理論的メモを記入した。これを繰り返し、他の分析データから具体例を追加した。②生成した概念の関係を検討してカテゴリーに分けた。カテゴリーの関係から関係図を作成し、分析結果の概要を簡潔に示すストーリーラインを作成した。なお、分析は①までの作業を著者が行い、②の作業を青年期の臨床に携わる公認心理師3名と著者が行った。その後、青年期の臨床に携わる臨床心理士3名と作成した関係図及びストーリーラインについて検討の機会を設け妥当性と信頼性の確保に努めた。臨床心理士との検討の中で、カテゴリー間で意味のある関連が見いだされたことから、カテゴリーを小カテゴリーと大カテゴリーに分類し、より包括的なカテゴリーも作成した。

倫理的配慮

本調査は所属大学人間科学研究科教育学系の倫理審査委員会の承認を得て実施した。調査を実施する際に、インタビューの協力は強制ではないこと、個人が特定されることはないこと、回答してもらった

データは研究以外の用途で使用しないことを口頭で説明を行った。面接も騒音がなく、第三者の出入りすることのない密室において行った。加えて、インタビューに際し、著者が研究の趣旨や個人情報の保護に関して書類を用いて説明し、署名の形で了承を得た。

結 果

分析の結果、最終的に14個の概念と、4個の小カテゴリー、4個の大カテゴリーが生成された。最終的に生成された概念、小カテゴリー、大カテゴリーをまとめたものをTable 2に示す。カテゴリー相互の関係をFigure 1に示した。以下、概念名は【】、小カテゴリーは<>、大カテゴリーは<>>でそれぞれ示す。各概念の定義については「」, 各データからの具体例の引用はイタリック体で示すこととする。

生成されたカテゴリーの内容とカテゴリーの相互の関係

a) <<成育歴からの困難感>> 対人関係に入っていく前に持っているものとして、<<成育歴からの困難感>>があり、【過去に囚われる】気持ちや【性役割の認識】からなる。人との関係を紡ごうとするとき、「過去の出来事に囚われて現在の状況にも影響すること」を感じる。また、「性役割を意識した振る舞いをしなければならぬと感じること」も生じる。

b) <<外界への内的な構え>> もともとの困難感、<<外界への内的な構え>>を形成する。<<過剰な同調意識>>は、【環境への表面的な追従】、【新奇場面での不安、緊張】からなる。対人関係において「社会的な規範を深く考えずに守ろうとすること」を行う一方で「新奇場面での関係形成に困難を感じること」があり、大きなストレスとなっていた。<<自己の振り返り>>は、【環境に合わせることの潜在的な承服しがたさ】、【対人関係を築くことへの苦手意識】、【消極的自己表出】からなる。環境に合わせようとする気持ちがある一方で、「環境に合わせていると自覚して生じるいら立ちのこと」を意識するようになり、「対人関係の形成に対して不安が現れること」も起きるようになっていった。また、自分の考えがあるのに言えないと言ったように「自己表出にマイナスのイメージを持つこと」がある。これに対して、<<傷つきを恐れる気持ち>>は、【他者を下に見て自己を保つ】、【注目されることへの恥意識】からなる。「自分よりも出来て

いないと思う人を意識して安心すること」を行い、「自分に関心が向けられると、うまく行動出来なくなってしまうこと」も感じている。<<外界への内的な構え>>によってうまくいかなさを体験することにより、<<痛みを伴う自己理解>>も増す。

c) <<痛みを伴う自己理解>> <<痛みを伴う自己理解>>は、【理想的対象との差の気づき】、【主体的になれないことの不甲斐なさ】からなる。【理想的対象との差の気づき】は、「自分の理想と自分の差を思い知ること」である。また、環境に表面的に合わせることで対人関係において自分を保っている一方で【主体的になれないことの不甲斐なさ】を感じている。それは、「環境に合わせるしか出来ない自分に不甲斐なさを感じること」である。

d) <<受容と新たな方法の模索>> <<受容と新たな方法の模索>>は、【受け入れられることによる自己受容】、<<振り返りを経ての考え>>からなる。<<振り返りを経ての考え>>は【適切な方法の試行錯誤】、【自己の適応方法の気づき】からなる。様々な葛藤や内的な構えを持っているが、【受け入れられることによる自己受容】のように「他者に自己を受け入れられ、自分で自分を受け入れられるようになること」によって、自身を受け入れられるようになっていく。そこから「振り返って状況に即した行動を考えること」である【適切な方法の試行錯誤】が増す。そして、「環境調整のやり方が適応に役立っていると気づくこと」である【自己の適応方法の気づき】が生まれた。

考 察

概念名は【】、小カテゴリーは<>、大カテゴリーは<>>でそれぞれ示す。各概念の定義については「」, 各データからの具体例の引用はイタリック体で示すこととする。

意識している自己の側面と対人関係の変容について 青年期において、対人関係を築く困難さには先行研究といくつかの共通点が見られた。友人関係の調査研究を行った上野・上瀬・松井・福富(1994)によれば、心理的距離が大きく、同調性も大きい「表面的交友群」の男子は劣等感や問題行動慮などの葛藤が高いという結果が得られた。これは、それぞれ本研究で示された<<過剰な同調意識>>および<<自己の振り返り>>と共通している。【環境への表面的追従】においては、「理由とか考えない(D)」と語られてい

Table 2 生成した概念と大カテゴリー及び小カテゴリー

大カテゴリー名	小カテゴリー名	概念名	定義
成育歴からの困難感		過去に囚われる	過去の出来事に囚われて現在の状況にも影響すること
		性役割の認識	性役割を意識した振る舞いをしなければならないと感じること
外界への内的構え	過剰な同調意識	環境への表面的追従	社会的な規範を深く考えずに守ろうとすること
		新奇場面での不安、緊張	新奇場面での関係形成に困難を感じる
	自己の振り返り	環境に合わせることの潜在的な承服しがたさ	環境に合わせていると自覚して生じるいら立ちのこと
		対人関係を築くことへの苦手意識	対人関係の形成に対して不安が現れること
	傷つきを恐れる気持ち	消極的自己表出	自己表出にマイナスのイメージを持つこと
		他者を下に見て自己を保つ	自分よりも出来ていないと思う人を意識して安心すること
痛みを伴う自己理解		注目されることへの恥意識	自分に関心が向けられると、うまく行動出来なくなってしまうこと
		理想的対象との差の気づき	自分の理想と現在の自分の差を思い知ること
受容と新たな方法の模索	振り返りを経る考え	主体的になれないことの不甲斐なさ	環境に合わせるしか出来ない自分に不甲斐なさを感じる
		受け入れられることによる自己受容	他者に自己を受け入れられ、自分で自分を受け入れられるようになること
		適切な方法の試行錯誤	振り返って状況に即した行動を考えること
		自己の適応方法の気づき	環境調整のやり方が適応に役立っていると気づくこと
具体例			
浪人してた時に色々あって、変わってんかって言われても個性があるというよりも、人と打ち解けられない要素として捉えてしまうんです。(A)			
自分は男性だからこは話をつけねばならないとか、そういうようなことを父親から伝えられてきているんです。(B)			
規範に合わせるっていう方が強いっていうか、理由とか考えないなって。(D)			
初めて話す人には、話がかみ合わずにぼそぼそってってしまうんで、余計にその、緊張するっていう感じなんです。(A)			
人と話す時は有益なことを話したいのに、でも周りに合わせて雑談しちゃう自分がいるのは良くないなって思ったりして。(E)			
僕は結構、昔は人嫌いが激しかったんで、一人でいることが多かったです。目を合わせるのもあまり得意でないの。(C)			
自分の意見っていうか、自分のしたいことを大きく主張できないのがデメリットですかね。(D)			
僕よりも怠惰な子は周りにいるんで。そういう人を見て、安心しがちみたいなどころはありますね。自分が一番怠惰だと思つとしんどくなってしまうので。(B)			
前に出てしゃべっていると、頭が血が上りやすくなるっていうか、頭が真っ白になるんです。(E)			
誰も気が付いていなかったことを注目している人がいて。自分はそこまでは遠いかなって気がしますね。(E)			
間違っても言わないと、自分で納得ができない。でも言えないから、自分の力不足を感じますね。(B)			
個人的なやつって思われたんで。それで向こうが受け入れてくれるんで、自分の言いたいことを言ってもいいんだって自由ができるようになりましたね。(C)			
自分の考えを違う角度から見直して、思考の表現方法を考えるようになったなって。(A)			
自分のお人よしで良くないと思っていたところは、実は温厚っていう意味もあるんだなって思って。それで相手が喜んでくれたら凄いい嬉しい。(D)			

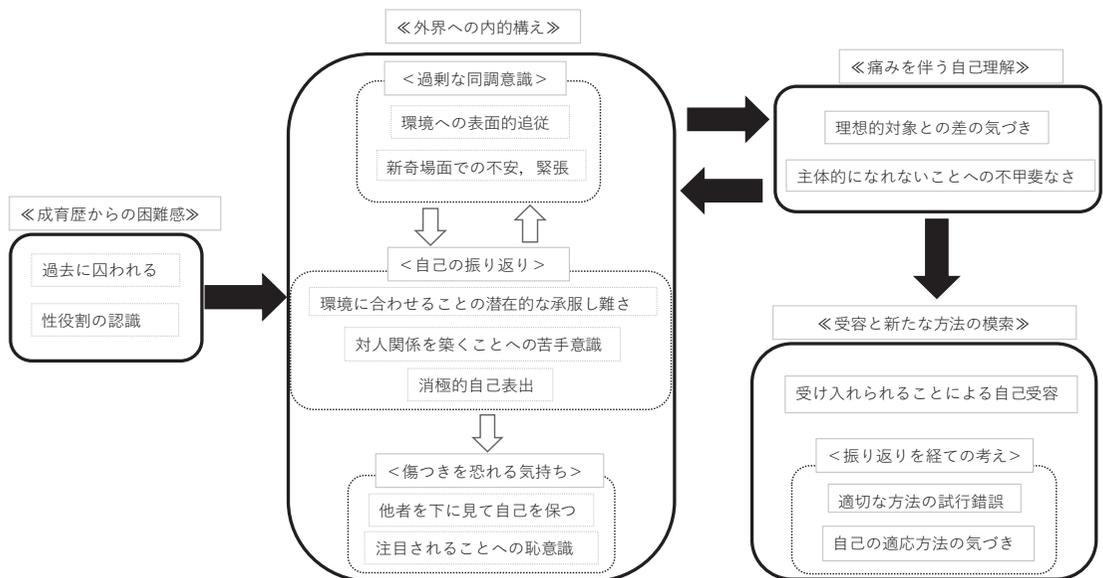


Figure 1 青年期の対人関係における自己の側面の変容についてのカテゴリー関連図

る一方で、【環境に合わせることに潜在的な承服しがたさ】は、「有益なことを話したい」気持ちと「周りに合わせて雑談しちゃう自分がある(E)」ことを意識して葛藤している気持ちがみられた。

また、気持ちの揺れが見られる一方で、「目を合わせるのもあまり得意ではない」と感じる【対人関係の苦手意識】や「自分のしたいことを大きく主張できないのがデメリット(D)」と言うような、うまく表現出来ないもどかしさがある可能性も示唆された。【新規場面での不安、緊張】にもあるように、他者からの否定的評価を気にしてしまうことが語られており、集団への適応と自己との間でどのように折り合いを付けるかという葛藤があると示された。

それぞれの葛藤の背景として、「浪人してた時に色々あって、変わってんなって言われても個性があるというよりも、人と打ち解けられない要素として捉えてしまうんです(A)」というように、【過去に囚われている】ことも一つの要因となっている可能性も示唆された。＜傷つきを恐れる気持ち＞という小カテゴリーが生成されたように、否定的な自己部分と向き合う自分を恐れる気持ちがある。そのため、「僕よりも怠惰な子は周りにいるんで。そういう人を見て安心しがちみたいところはありますね(B)」というような【他者を下に見て自己を保つ】方法に頼り、自己の安定を保っている。しかし、こういった面

は対処方法にしか過ぎず、「前に出てしゃべると頭が真っ白になる(E)」という語りにみられるように、【注目されることの恥意識】などにつながっていく。

前述のような要素が複雑に絡み合い「＜外界への内的構え＞」として機能している。こういった難しさは、Winnicott (1965) の指摘するような早期の養育者との関係から外界に迎合する形で自己を形成する「偽りの自己」と類似の問題であると考えられ、支援する際には、支援者は表面的には適応をしても内的には自己に関する葛藤や不安を抱えている可能性を心にとどめておく必要がある。また、今回得られたデータが大学1年生であるため、大学という新奇場面で適応を保つため、表面的に合わせている可能性が強いことも考慮にいれておく必要がある。

新しい方法の模索とそれを支えるもの

自己の使い分けによって対人関係の間に生じる葛藤や様々な感情や考えと、それに伴い自己側面がどのように変容していくかのプロセスは、最終的に自己を振り返りにより適応的なものへと修正されていくプロセスであることが示された。

こういった自己理解を深めていくためには、【受け入れられることによる自己受容】という概念が生成されたように、悩みをもつ自己を受容してくれる居場所があることが十分に必要である。北山(1993)では、「居場所がない」と「自分がない」ことの関

連を指摘しており、居場所を与えられていることが自己を考えるための前提となることを考察している。《外的世界への内的構え》として、外的な環境を恐れ、適応が難しいと感じている面が見られた。しかし、「個性的なやつって思われて、そこで向こうが受け入れてくれるんで(C)」というような、受け入れられる体験を通して、より自己について安心して振り返ることが出来るようになっていると考えられる。榎本(1999)でも、聴き手の反応をモニターして他者の視点を取り込まれることで、過去体験が新たな構図のもとに、これまでとは違った意味合いを持ち、肯定的な意味を見出すことが促進される点が指摘されている。そのため、他者に受け止めてもらえるという体験を通して、相互作用的に自己理解を深めていくことが示唆された。

《痛みを伴う自己理解》では、【理想的対象との差の気づき】と【主体的になれないことの不甲斐なさ】という思いからなる。中山・中谷(2006)は青年期において自己愛が上昇して不安定な自己を保とうとする、と指摘している。そのため、理想的対象を持つことは不安定な自己を支えるための一つの手段であることが考えられる。本研究ではこの理想的な対象と自分は違うという認識を持つことが非常に痛みを伴って理解される可能性があることが明らかになった。こういった体験は「間違っても言わないと、自分で納得できない。でも言えないから、自分の力不足を感じますね(B)」という発言に見られるように、現在の自分と理想とのギャップを感じてしまう。若者の生きづらさについての心理臨床的アプローチを検討した大塚・穴水(2018)は、表現が育まれる環境を作っていくことの重要性を指摘した。けれども従来の研究では、自己が変容していくプロセスの中で自分が理想的対象となり得ない現実が非常に痛みを伴うことは大きく取り上げられて来なかった。近年CMCが増加し友人に合わせることが求められる中で、周囲に合わせきれない自分がいるという気づきは脅威になりうると考えられる。なお、今回得られたデータが大学1年生の記述が中心であった。稲吉(2017)は、大学初期は新しい生活への適応に関心が向けられると論じている。そのため、今回のデータでは、新しい集団場面により不安を抱えがちであると考えられ、周囲に合わせきれない自己の認識がより脅威となっている可能性に留意する必要がある。他

の要因も含め、より多角的に検討していく必要があるだろう。

しかしこの痛みを受容的な環境の中で安全に振り返ることが出来た結果、現実的に新たな適応方法について模索し、「お人よしで良くないと思っていたところは、実は温厚っていう意味もあるんだなって思って(D)」と否定的な自己の側面においても肯定的な部分を発見することが出来た。本研究から、本人が悪いと認識している自己の側面を排除せずその可能性について真剣に葛藤することを助け、その考えを保有した上で自己を振り返ることが必要であると示された。これにより生育歴からの困難が解決されることはないが、個人の受け入れがたい側面を自己の一部としてより真摯に受け止めることが出来、傷つきを避けようとする代わりに現実と折り合いを付けることが出来た。この結果、自己の統合が進み、自己経験の統合が促進されたようである。本研究から、関係性によって生じる生きづらさについての臨床的取り扱いについて検討したとき、その準備段階として現実的な自己に触れる体験は痛みが生じることを意識しながら、支援者は個人が受け止めることが難しい彼らの自己の側面を悪い側面として排除せず受け入れていく姿勢を示していくことで、自己の統合が促進を手助けすることが求められる。

まとめと今後の課題

本研究では、自己の使い分けによって対人関係の間に生じる葛藤、様々な感情や考えと、それに伴い自己側面がどのように変容していくかのプロセスについて調査・分析し、回答集団に偏りがある限定的な語りではあるが、次の結果を得た。対人関係に入っていく前に、過去のネガティブな体験に囚われ、時として対人関係に入っていく際、表面的に環境へ合わせてしまったり、関係性を持つことへの苦手意識を持ったりすることが明らかになった。一方で、本人が否定的に感じている自己の側面を排除することをせず受容する環境があることで、肯定的な自己の側面を見つめることが出来、傷つきを避けるだけでなく現実的な折り合いを考えられることが示唆された。こういった難しさを支援する際には、彼らの語る否定的な側面を理解した上で、それを否定や打ち消しを行わず受容していくことが自己の統合の促進を支えていくうえで必要である。

しかしながら、以下の点について課題が残された。

本研究では、対人関係の間に生じる葛藤や感情が自己の統合をしていくプロセスへの考察にとどまっている。このような関係性において、どの段階でどのような状態になると、神経症の問題へと発展していくかということは明らかに出来ていない。実際の対人関係を起因とした精神障害的な状態から回復プロセスとの関わりについてはさらなる検討が必要である。

また、今回本研究に参加した研究協力者は、男性にとどまっている。落合・佐藤(1996)は、友達との付き合い方に性差があると指摘しており、女子は他者志向の共感能力が高い特徴がある一方で、男子は友人から独立した存在として自律的な言動をする傾向があると指摘している。そのため、今回得られたプロセスは男性という要因が強く影響を及ぼしている可能性がある。本研究ではその可能性について詳しく検討することはできなかったため、今後性差についてもさらなる詳しい検証をしていくことで、より精緻なものとするができるだろう。こうした点に留意し、今後調査を行うことでサンプリングのバイアスを出来るだけ少なくしていくことが求められる。

引用文献

- 雨宮処凛・菅野隼人 2008 「生きづらさ」について—貧困、アイデンティティ、ナショナリズム— 光文社新書。
- 浅野智彦 2006 若者論の失われた十年 浅野智彦(編) 検証・若者の変貌—失われた十年の後に— 勁草書房 pp.1-36.
- Carlson, S. M. 2009 Social origins of executive function development. *New Direction for Child and Adolescent Development*, **123**, 87-98.
- 土井隆義 2008 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル— 筑摩書房。
- エリクソン, E. H., 仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会 みすず書房。(Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society*. New York: Norton.)
- 榎本博明 1999 <私>の心理学的探求—物語としての自己の視点から— 有斐閣。
- 古沢頼雄 1973 人格形成の過程 依田 新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留 宏・西平直喜・藤原喜悦・宮川知彰(編) 青年の性格形成 現代青年心理学講座 4 金子書房 pp.41-82.
- 稲吉玲美 2017 大学生における心理的自立の主観的実感プロセス 心理臨床学研究, **35**, 199-205.
- 木下康仁 2003 ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グランデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂。
- 北山 修 1993 自分と居場所 岩崎学術出版社。
- 松田君彦・広瀬春次 1982 青年期における自己像と自我同一性 教育心理学研究, **30**, 2, 157-161.
- 三好智子 2001 “個” — “集団” 間葛藤の観点からみた青年期後期の自我同一性の形成過程 心理学研究, **72**, 4, 298-306.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム— 金子書房。
- 中山留美子・中谷素之 2006 青年期の自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, **4**, 188-198.
- 中澤幸恵 2018 インターネットと現代の思春期・青年期クライアントとの心理療法 精神分析的な心理療法フォーラム, **6**, 103-108.
- 成田善弘 2006 終章 昨今の青年期病像にみる意識と無意識 氏原 寛・成田善弘(編) 意識と無意識—臨床の現場から— 人文書院 pp.283-300.
- 仁尾友紀・石田 弓・内海千穂 2009 大学生の携帯メールの依存について—友人関係における不安との関連— 徳島大学総合科学部人間科学研究, **17**, 73-90.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 岡田 努 2007 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, **15**, 135-148.
- 大塚 尚・穴水幸子 2018 主観的体験から探る現代の大学生の「生きづらさ」の実態 心理臨床学研究, **36**, 166-177.
- 斎藤 環 2013 承認をめぐる病 日本評論社。
- 柴山雅俊 2012 現代社会と解離の病態 柴山雅俊(編) 解離の病理 自己・世界・時代 岩崎学術出版社 pp.163-192.
- 高田利武 1997 自己概念の特質と形成 加藤隆勝・高木秀明(編) 青年心理学概論 誠心書房 pp.33-49.
- 時岡良太・佐藤 映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井友香・木村大樹・鈴木優佳・橋本真由里・岩城昌子・神代末人・桑原知子 2017 高校生の LINE でのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響 パーソナリティ研究, **26**, 76-88.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理距離 教育心理学研究, **42**, 21-28.
- Winnicott, D. W. 1965 *The maturational processes and the facilitating environment*. London: Hogarth Press.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 1987 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究(第2報) —ふれあい恐怖(会食恐怖)の本質と家族研

究一 安田生命社会事業団研究助成論文集, **23**, 206-215.

山本真理子・松井 豊・山城由紀子 1982 認知された自己の諸構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

山田剛史 2004 現代大学生における自己形成とアイデンティティー-日常的活動とその文脈の観点から- 教育心理学研究, **52**, 402-413.

(受稿: 2020.5.4; 受理: 2020.9.3)
